

からだで学ぶ（その2）

—— 肢体不自由の表現「口で描く」から学ぶ ——

奥 山 俊 子

は じ め に

現代社会がどんどん変わって行って、努力しないでもいろいろなものが食べられる、生きていかれる、勝手きままなことをやっても毎日結構楽しく過ごすことができる、という考え方が少年少女に行きわたっている。と大野晋、上野健爾の両氏が2001年「ゆとり教育」について問題を投げかけてから、もう10年が経とうとしています。

ところで、今から半世紀前の1964年にC. H. ウォディントンが西インド大学の教員および学生に対して行った講義「第二章遺伝—生まれつきの可能性」のなかで環境と遺伝現象について次のように述べています。「遺伝現象を理解するための第一歩は、両親はその子に、すでにできあがっている形質の一揃いを渡すわけではなく、ある可能性を一揃い渡すのだということを認めることである。（中略）あなたの両親がともにアングロサクソンであるとしても、あなたは白い肌をそのまま受けつぐわけではない。あなたは日の光が弱いところで育った場合、肌の色が非常に白くなるような潜在的な可能性を受けつぐだけである。したがって、強烈な日の光にたびたびさらされるようなことがあれば、肌の色はかなり茶色っぽくもなりえるのである。子に遺伝する、上のような潜在能力の集合をさして、現在はジュノタイプ（遺伝子型）という名で呼んでいる。これに対し、人がある特定の環境のなかで生育し、その場合実際に発現させる形質の集合はフェノタイプ（表現型）とな

づけられる。どのジュノタイプをとってみても、発生の行われる環境にちがいがあれば、それに応じて多くのいくらかちがいのあるフェノタイプをもたらすものなのである。」改めて、「環境」と「人間の可能性」について考えさせられます。

さて、障害を持ちながらも美術活動を続け、逞しく生きている人達があります。彼らの表現活動の疑似体験を通して「生きる」ことの学びがあると考え、Y保健医療大学保健医療部の看護学科・理学療法学科・作業療法学科の1年生（「人間の理解」科目群の選択科目「美術」の受講生）を対象に「口で描く」表現活動の体験学習を続けてきました。（2000年～2009年）ねらいは「障害者の世界から学ぶ」という視点ではなく、「われわれの中にいる障害者から学ぶ」という視点をもつことです。学科の特徴として、身体障害者に対する知識もある程度持ち、また口で絵を描く画家達へ興味を抱いている者もいます。この「口で描く」体験学習以前に、視覚障害者の表現活動の疑似体験としてアイマスクを装着し、粘土による立体表現やカバーアップテープを使った平面表現を体験学習しています。

1、肢体不自由障害者に関する資料の提示

(1) 絵本『わたし いややねん』吉村啓子・文 松下香住・絵 1980年（偕成社）

『わたし いややねん』を「文」と「絵」の2つの教材に分けて提示します。はじめに、22ページまで（表1）を読み、どのような人の気持ちを表したのか各自考えた後でグループディスカッションします。その後全てのページの絵を見て、「そやけど なんで わたしが 強ならなあかんねんやろーか」と著者の言葉を各自が考察をし、終わります。

この絵本は、脳性小児マヒで手足に障害を持ち、外出する時は車いすを使う著者が、人間としての叫びを素直につづった絵本です。友人として著者の車いすを押し続けた画家の絵が、言葉以上の思いを伝えます。（表紙カバーより）また、すべての人が、なんでもなく、ふつうに、快適なくらしができるような社会になってほしいと、著者はあとがきで述べています。

さて、この絵本の表現方法の特徴を二つあげることができます。一つは、言葉の表現が「関西ことば」です。そして表現された絵は全て「車いす」だけが描かれ（14ページから19ページまでは他のページと車いすの表現技法が異なり3部構成になっています）人間の

姿かたちは全く描かれていません。なぜ描かれていないのか。学生に「表現する」ことの問題提起になります。

（表1） 絵本『わたし いややねん』全文 Pはページ数を表記

1 部		2 部	
P	文	P	文
1	わたし でかけるのん いややねん		
2	人の ようさんいてるとこ きらいや	14	先生が いわはった 「強い心を もちなさい 強くなりなさい」って
3	ゆうえんちも デパートも	15	そんで わたし かんがえてん
4	あんまり 行きたない		
5	みんな じろじろ見るから いややねん	16	ポパイは ほうれん草たべて 強なってんてエ わたし いやんなるくらい ほうれん草たべてんけど いっつも強なった気 せえへんねん
6	わたし 宇宙人と ちがうでエ	17	なにたべたら 強なれんねんやろ
7	怪獣でもないで わたし	18	どないしたら 強なれんねんやろ
8	ケーキもたべるし ジュースものむ	19	やっぱり わたしかて なんにもなかったら ゆうえんちも デパートも 行きたいもん
9	くさいうんこも きいろいおしっこも でるでエ		
10	なんで 見なあかんのん		
11	ちゃんと 心臓かて うごいている		
12	なにが めずらしいのん		
13	どこが ちがうのん		
3 部			
P	文		
20	強い心て なんや		
21	強なるて どういうことや		
22	わたしが 強なったら こわいやろなあ		
23	そやけど なんで わたしが 強ならなあかんねんやろーか		

(2) ビデオ『重度障害者 絵筆に込めた闘志』1999年アメリカ、ホームボックス オフィス作（約45分）を見て、感想を書く。（2002～2009年）

1) 『重度障害者 絵筆に込めた闘志』の内容

幼少時代の母との関わり、養護学校から普通高校、大学、そして大学院への進学、画家ダンの生活を描いたドキュメントです。ダンには脳性小児マヒで手足に障害があるだけでなく、体が勝手に動きます。また、通常に言葉を聞きとるのも難しく、コツを要します。しかし、アパートで1人暮らしをしながら大学で美術を専攻、ヘッドギア

に筆をつけて、頭で絵を描く青年画家です。個展を開き、作品の評価は高く支持されています。また、施設に入所させずふつうの子と同じように育てた母を筆頭に、ダン「ひとりの人間」として関わっている教授・友人達の姿があります。

2) 感想

- ・コンピューターを通して話すのではなく人と顔と顔を合わせてコミュニケーションをしたいという、当たり前彼の言葉に心がしめつけられるように感じた。
- ・膝でパズルをやったり、人には無限の可能性があると感じた。
- ・安定しない姿勢で絵を仕上げる技術にも驚かされた。
- ・ダンは手足をバタつかせながらいろんな動作をしていて、手足がないのともまた違う感覚なのかと思いました。ダンは筆を自由に使えると言っていたことに驚きました。
- ・「描く」ことが「生きる」ことなんだろうなと感じた。
- ・絵は通訳なしで自分を表現できる。
- ・ダンは絵によって、言葉では表現できない自分の内面を正確に伝える能力を持っている。
- ・『わたし いややねん』の車いすがドーンと迫ってきたみたいなきっかけがあった。
- ・絵に挑む強さは、私たち健常者ではかなわないと思ったし、健常者と変わらないと思った。
- ・きっと想像を絶する努力をしてきたんだろうなと思います。それは「絵が好きだ」というところが突き動かしたもので、障害者が健常者かなんて関係ありません。
- ・ダンの生活を見ることができ、より描くことの意味を理解する手掛かりとなった。
- ・無表情の人の絵を描いたとしてもそこにはなんらかの感情が感じられる。

ダンの「生きる」強さや、母の子に対する愛情（健常児と全く変わらずに育てた）に共感している内容がほとんどでした。

2、疑似体験：「口で描く」表現活動

「口で描く」表現活動は手足が不自由な人たちの表現方法の1つです。手足が不自由な青森の佐藤さんは、筆をくわえ夢や葛藤を描いてきましたが、激痛で個展を休止することになったそうです。絵との出会いは8歳の時。小学校の先生に手を持たれて絵を描かされた時に「自分の絵じゃない」と強い違和感を持ち、「口なら動かせる」と筆をくわえ、たまっていた思いを画用紙に描いた。その絵は展覧会で受賞したそうです。そして元画家の先生が、自分を障害者ではなく「ひとりの芸術家」とみてくれた事が、描くことを押し進めたようです。理解者の存在は大きく強く生きる力になっています。

(1) 「口で描く」ことをイメージしてみる（2009年）

- ・自分の思い通りに細かい部分を描けない
- ・手を使えないからバランスをとるのが大変で、簡単な直線すらも描けなさそう
- ・手を使わないで姿勢を保持しておくことが大変だと思う
- ・（体力を使う）顎が疲れる
- ・口にくわえる分、息苦しい
- ・首を主に動かして描くと思うので、首も疲れて痛くなりそう
- ・ついている膝も痛くなりそう
- ・手をつけないので、腰が痛くなる
- ・両手が使えないので上半身がふらつきそう
- ・自分が描きたいと思う場所に体ごとうごかさなきゃいけない
- ・体のバランスをとりつつ描くこと
- ・バランスをくずしたら絵をぐちゃぐちゃにしまいそう
- ・バランスをくずしたとき顔からたおれてしまう
- ・描くときの力加減
- ・両手なしで床にある紙に画くには、かなりの腹筋と背筋が必要になること
- ・とっさに手を使いたくなくても使えない

- ・口で絵具を混ぜたり、とったりするのが大変
- ・画用紙が動かないようにしなきゃいけないこと

(2) 「口で描く」表現活動

1) 「口で描く」違いを「利き手で描く」と比較をしてみる。

- ①利き手に筆を持ち、床に画用紙（八つ切サイズ）を置き、友人を描く。制作時間は5分。
- ②両手を布テープで固定する。床に画用紙（八つ切サイズ）を置き、口に筆をくわえ、腰をかがめる状況で、友人を描く。制作時間は5分。

2) 制作上の留意点

- ①姿勢を保持するのに困難を伴う事がわかって、ダンに共感した学生たちが、ダンの描画スタイルに可能な限り近いスタイルを受け入れて望みました。
- ②筆は、紙に対して摩擦の抵抗がない分、筆の運びはスムーズです。
- ③筆をそのまま口にくわえると滑り落ちやすい。筆の軸にビニールホースを被せ、口から滑り落ちない工夫をしました。
- ④2006年にホースの素材をビニールからシリコンへと変える事で、顎への負担の軽減を図りました。また、筆もスムーズな動きになりました。
- ⑤シリコンに変えてからも5分の制作時間を続けていましたが、2009年は10分に延長しました。体の痛みに合わせて間を取りながら、10分間描き続けている様子がうかがえました。

(3) 制作・作品についての感想（2002～2009年）の抜粋である。（下線は筆者）

1) 2002年

- ・手でバランスをとらずに前に重心をかけるのも始めのうちは少し怖かった。
- ・口や足で絵を描く障害者の方々が実在し、それらが本当に美しく繊細で優しい絵である事もまた、事実だ。絵も何でも手でしかできないわけではない。自分を表すために使うものは自分の全身であるのだ。
- ・疑似体験としては、たのしかったが、後天的な障害で口や足でしか絵をかけなく

なったら、相当たまるように思われる。

2) 2003年

- ・想像していたより、すごく疲れたし、難しかった。たった5分でこんなに疲れるのだから、花の絵をあんなに上手に描くには相当の体力があるんだろうと思った。それから、細かいとこの目や眉がとても難しく、まっすぐ引けなくてゆがんだ顔になってしまった。けれども、うまくいなくてがんばろうとしたことが面白かった。また、いろんなのを描いてみたいと思った。
- ・口で描くのは本当に大変だった。口の周りの筋肉がすごく疲れた。頭もいっぱい動かさなくちゃいけなくて、頭に血が上るような気がした。一本一本の線を見てみると好きな線は、口で描いた方が多いように感じた。
- ・肉体的にも精神的にも力を使うのでかなり疲れた。筆を口にくわえ、歯できちんと噛んで、筆のてっぺんを舌で押さえると描きやすい。手で描くより立体感があるように思える。
- ・頬の肉がつっぱって辛かった。頭を動かす、首を動かす、いろんな動きが走りまわっていると感じた。
- ・体の一部分が動かないだけで、こんなにも違うとは思わなかった。でもいい体験ができたと思う。
- ・絵としては、口で描いた方が上手いと思う。いい絵とは意外なところから生まれるのだと思った。もともと絵が得意ではないからそのように感じたのかもしれない。
- ・横方向の線は首の回旋や体幹の回旋運動で、縦方向の線は首の屈伸運動および股関節の屈伸運動によって描いた。
- ・手で描くよりも表情は豊かになるような気がする。口で描いた方は、見てて気持ちがいいし、描いても気持ちがよかった。
- ・いつも口は食べたり、しゃべったりして使っているのもう少しくましく描けると思っていた。手のすごさにも改めて気付きました。
- ・今、障害者の方々が描いた絵を見れば、いままで思っていた観念とは違った見方で、さらに新鮮に見れると思う。
- ・星野さん、河合さん、ダンみたいになんかすごい努力をしているんだと思う。1枚

の絵を朝から晩まで10日間くらい描き続けるなんて私には無理。だから一生懸命に絵に打ち込んで、人々の心に残る感動させる絵を描いている星野さん達を尊敬する。普段使っている手が、いつもどんなに使っているか、感じる事ができた。

- ・手で描いた時はどの線も同じ太さで、細い線が多かったけど、口で描くと太さが一本一本異なるし、太い線が多くて、勢いがあるとはこういうことなんだなあと思います。
- ・布テープをした時の不自由さ、外した時の解放感にびっくりした。

3) 2004年

- ・絵で自分の気持ちを表現すると言っていたダンの気持ちが、脳性小児まひを勉強して、自分で「口で」絵を描いてみて、少しわかるような気がした。
- ・全体的に線が太くて濃いので存在感があると思う。手で描いた絵は表面的でサラッとしていて平面的な感じがした。口で描いた絵はドーンと重くて立体的な感じがした。他人の絵も同じように感じた。みんな絵はぐちゃぐちゃだったけどそれなりに特徴があって一生懸命さが伝わってきた。
- ・私の描いた2枚の絵は全く違う感じがしました。同じ手順で描いたのに仕上がりがこんなに変わってくるものなのだと思います。手と口とではこんなにも違うのですね。口で描く特訓をすれば上手になれるのでしょうか。
- ・みんなの絵を見るととても楽しい気分になりました。笑顔が多かったけれど手で描いた絵よりも本当に心から笑っているように思えました。
- ・体を使って描くので手で描く以上に（その人）が絵に出てくると思います。
- ・全身を使って描いているので手で描いていた時よりも勢いがあった。手で描いているときに勢いをつけるときは意識しなければできないが、口で描くときは自然と出るなあと思った。
- ・無意識かもしれないけど自分が特徴だと思った部分が強く表れているように思える。上手さでいったら右手に劣るけど、表現力や力強さでいったら口の絵の方が断然豊かで強いと思った。
- ・普通に描くと髪の毛は黒く塗りつぶせるほどの線の数だけど、口筆だと白いところが目立っている。

- ・手で描いた絵はかけたところがない完璧に近いもの「作られたもの」だったが、口で描いた絵はどこか素直でとても味のある作品がたくさんあったように思った。どの絵も特徴をしっかりとらえていてモデルの雰囲気がじっくり伝わってきた。
- ・口で描いた絵には今までにあまりなかった（自分に）タッチで描けているので新鮮さがあった。ダンの絵が力強いと感じた理由も分かったような気がする。絵を描く事はとても好きなので、こんな言い方はへんだが、口で描いたときのタッチを参考にしたいと思う。線の数はいくつでも大きな流動感があると思った。
- ・とにかく手を使わずに描くのは大変だ。これはやってみないとわからない。

4) 2005年

- ・右手で描いたのと同じように描いたりしている人もいたので驚きました。
- ・ただ目の前の物体を写すのではなく、その人自身の個性が表れているからに違いないと思った。自分の頭の中で浮かんだモデルの顔の特徴だけを思い出して描いてしまった。
- ・集中力・体力を出し切っているという必死さというものが感じられた。絵を完成させると達成感みたいのがありました。この達成感は手で描く時とはまた違った感じの達成感だったと思います。
- ・ペンで描くのではなく、筆で描いたことが口で描く絵の面白さを大きくしている要因。絵も全体的に大きくなり、細かい部分を描くのは難しかった。その分筆の流れ方（跳ねたり、蛇行したり）は面白くできた。手で描くと左右対称になるが、口を使うと非左右対称になる。そういったバランスの悪さも作品のよさなのかもしれない。
- ・墨をつけすぎてしまったりしたが、逆にそれがよい結果になったのかもしれない。
- ・やや崩れた形が、モデルもしくは描き手の心が表れているっぽいです。いかにも芸術家風の作品だと思いました。将来臨床に出て、麻痺の患者さんと出会った時に、リハビリやコミュニケーションのヒントになればいいなと思います。
- ・思いどおりに動かせないからこそ表現したいと思う気持ちが強くなって、いい作品ができるのかなと思いました。

5) 2006年

- ・ 一筆一筆描いていくうちに、コントロールができるようになり、上達していく自分にすごく生きがいを感じる。まるで小学校のころ逆上がりや自転車ができたようになった時のようだ。
- ・ 手で描いた時は似せようという意識が強く、平凡な絵に小さくまとまってしまった。口で描いた時は、似せようと思っても、まったく思いどおりにいかなかったので見えたまま素直に描いたことがストレートで力強く描けたことにつながった。

6) 2007年

- ・ 足も麻痺していたらもっと大変だろうと思いました。それでも絵が好きで描き続けている障害者を持った人達は技術がすごいというより、その気持ちがすごいと思います。
- ・ ダンのすごさや障害者の気持ちがわかったという意見が多かった気がする。
- ・ わざとらしくも感じてしまう絵のタッチが存在せず、自然なタッチと感じさせ、我々の心にスッと入り込んでくる。そして大きな衝撃を残す。こう感じさせるのがこの絵の魅力であると思う。この絵を描いたことで、身体障害者についての考えが、180度変化したように思う。健常者と同じ動きができないから障害者。そのように彼らに対して思っていたように思う。我々の考えられないような器官を使って、同じような生活ができる。それこそが平等と考え、彼らの能力を発展させていけるような考えであると気づかされた。

7) 2008年

- ・ 今まで上手い・下手くらいの感想しか思い浮かばなかったが、今回口で描いてみて沢山の「いい絵」を見れた。描いた人の頑張りや努力がたくさん詰まっていて、それが絵の迫力につながり「いい絵」になったと思う。
- ・ 表情がある。小学生の描いた絵のよさと同じようなものを感じた。(うまく言えないが)
- ・ 想像したイメージ通りにはなかなか描けないものだった。しかし、そのもどかしさは不思議と厭にならず、夢中になって絵を描けた。
- ・ 失敗した線も一生懸命描いた証しだ。

- ・より簡略化して描こうとするので、顔の特徴が強調されて表現される。対象者のことを見て何度も何度も反復して思いながら描いていた。手で描いた時は、対象者の姿かたちをできるだけ正確に写そうということで頭がいっぱいだった。その違いが絵に表れている。
- ・絵が訴えてくるかどうかを基準に見ると口で描いた方が良い作品だったと思う。作品は見る人に何を与えるか、与えるものがあるかが大切なかなと思った。
- ・意図して描いた線でないものもその絵の中に、きちんと成立していることが楽しかった。

8) 2009年

- ・手で描いた作品よりも口で描いた作品の方が表情がやわらかく感じた。そして生きている感じがした。手で描いた作品は「絵」という感じがするが、口で描いた作品の方が表情がある気がして、「生」を感じられた。線にも自然と強弱がついたり、勝手に変なところへ線がとんだりしていて、髪の毛の無造作な感じなどが上手く表れているようだった。
- ・ふつうにきき手で描いた方は、口で自由に描いたものと比べて、少しきどったような、丁寧さがあると感じられた。それに比べて口で描いた方は、だいぶ形はいびつだが、目の表情などは優しい、やわらかい感じがした。ダンの絵にもそういう人の内面の部分を素直に表せているから、人をひきつけるのかもしれないと思った。
- ・みんなの作品を見ると口で描いた作品の方が面白いというか、良い作品だと思った。表現するということがよくわかる。
- ・口で筆をくわえて描いた作品は、筆の強弱が伝わって一筆一筆に力強さを感じる。髪の毛も一本一本が生きているように動きがある。表情も単なる「絵」ではなく、そこから飛び出してくるよう感じられる気がする。
- ・手で描いたものは上手下手はあるといってもみんな同じようなものだった。でも口で描いたものは、人それぞれで、口で描いた作品は個性があってすごくよかったし、上手下手では言い表せない良さがあったと思う。線も、太い細いがあって生きている絵というのが実感できた。

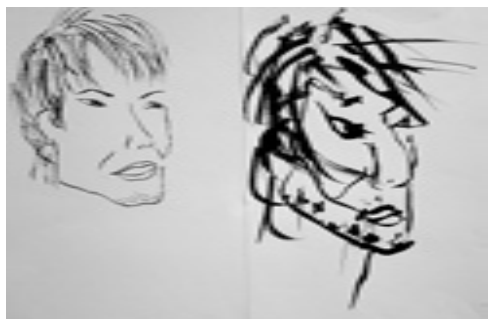
(4) 学生作品 (2002~2009) 抜粋 (左：利き手で描く 右：口で描く)



(写真1) 2002年



(写真2) 2002年



(写真3) 2003年



(写真4) 2003年



(写真5) 2003年



(写真6) 2004年



（写真7）2005年



（写真8）2005年



（写真9）2006年



（写真10）2006年



（写真11）2007年



（写真12）2008年



（写真13）2009年

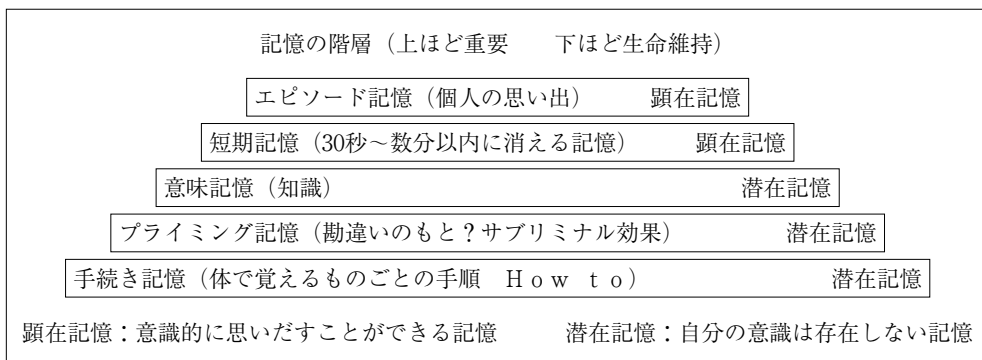


（写真14）2009年

3、考察・結果

「障害者の立場に立って考える。理解する」とよく聞きますが、実際には大変難しいことであると思います。「障害者を知る」努力をしてみることが大切だと考え、表現活動の疑似体験学習を重ねてきました。学生の感想から、将来関わるかもしれない病気を抱えた人が制作することを考える機会になり、有意義だったと感じている様子が見えてきます。でも有意義だと感じたのは一時で、時間が経てば忘れてしまう記憶でもあります。しかし、この学習体験は、非日常的行為で池谷裕二氏が言及している「個人の思い出」として思い出すことが可能なエピソード記憶と考えることができます。彼の「記憶の階層」(図1)によれば、この「口で描く」疑似体験は、意識的に思い出すことができるエピソード記憶(個人の思い出)となっていると考えられるからです。彼は、目・鼻・手・耳・舌などのさまざまな感覚の情報は、個人の経験を作り上げるために必要な材料で、いつ、どこで、何を見て、何を聞き、何を感じたのかといった材料を総合的に関連づけて「経験」という記憶を作る。この経験こそが「エピソード記憶」になると明言しています。

そこで、「口で描く」疑似体験はどのような「エピソード記憶」となりえるのか、彼らの感想を二つの観点から見てみました。



(図1) 『記憶力を強くする』池谷裕二

(1) 「障害者を知る」努力をした記憶

- ・ 体の一部分が動かないだけで、こんなにも違う
- ・ 布テープをした時の不自由さ、外した時の解放感にびっくりした

- ・横方向の線は首の回旋や体幹の回旋運動で、縦方向の線は首の屈伸運動および股関節の屈伸運動によって描いた
- ・障害者の方々が描いた絵を見れば、いままで思っていた観点とは違った見方で、さらに新鮮に見える
- ・花の絵をあんなに上手に描くには相当の体力がいるんだ
- ・障害を持った人達は技術がすごいというより、その気持ちがすごい
- ・一生懸命に絵に打ち込んで、人々の心に残る感動させる絵を描いている星野さん達を尊敬する
- ・筆を口にくわえ、歯できちんと噛んで、筆のてっぺんを舌で押さえると描きやすい
- ・将来臨床に出て、麻痺の患者さんと出会った時に、リハビリやコミュニケーションのヒントになればいい
- ・脳性小児まひを勉強して、自分で「口で」絵を描いてみて、少しわかるような気がした
- ・健常者と同じ動きができないから障害者。そのように彼らに対して思っていたように思う。我々の考えられないような器官を使って、同じような生活ができる。それこそが平等
- ・一筆一筆描いていくうちに、コントロールができるようになり、上達していく自分にすごく生きがいを感じる
- ・集中力・体力を出し切っているという必死さというものが感じられた。絵を完成させると達成感みたいのがありました

5分、10分の体験ですが、想像していた以上の体の痛みや動きの制限に、制作中の彼らは驚きの言葉を発していました。感想文や作品から、その時の様子が思い出されます。その中でも重要視したい点は、「上達していく自分にすごく生きがいを感じる」「達成感みたいのがありました」「描いても気持ちがよかった」「我々の考えられないような器官を使って、同じような生活ができる」という点です。「健常者と同じ動きができないから障害者」という考えが、「同じような生活ができる」方向性を模索し行動する事ができるだろうと気付いた事です。

(2) 「描く」表現の力に気づき、作品を見る目を培った記憶

- ・手で描くと左右対称になるが、口を使うと非左右対称になる。そういったバランスの悪さも作品のよさ
- ・簡略化して描こうとするので、顔の特徴が強調されて表現される
- ・太さが一本一本異なるし、太い線が多くて、勢いがある
- ・筆の強弱が伝わって一筆一筆に力強さを感じる。髪の毛一本一本が生きているように動きがある
- ・口で描いたときのタッチを参考にしたい。線の本数は少なくとも大きな流動感がある
- ・自然なタッチと感じさせ、我々の心にスッと入り込んでくる
- ・人の内面の部分を素直に表せているから、人をひきつける
- ・作品は見る人に何を与えるか、与えるものがあるかが大切
- ・想像したイメージ通りにはなかなか描けないものだった。しかし、そのもどかしさは不思議と厭にならず、夢中になって絵を描けた

自由に動かない筆だからこそ、技術の上手下手にとらわれずに、集中力・体力を出し切った必死さが表われている「いい絵」・「表現する」の意味を考えていることがうかがえます。

4、ま と め

「障害者の世界から学ぶ」という視点ではなく、「われわれの中にいる障害者から学ぶ」という視点を持つことが目的で、肢体不自由の表現「口で描く」体験学習を続けてきました。吉村啓子氏から「人間としての叫び」を聞き、映像でダンの生活を具体的に知って、障害者のダンには「描く」ことが「生きる」ことであることを知ることができました。ほんとうの「表現する」意味に気付いた学生が少なくはないようです。美術の知識・技法は教えられますが、自分の感情の表れである「表現力」を教えるのは難しいと感じていますから、そういう意味では、我々がなぜ自己表現をするのかを感じとったように思います。

また、「われわれの中にいる障害者から学ぶ」視点を持つ事ができたと考えられます。

「口で描く」疑似体験を通して、「健常者と同じ動きができないから障害者」ではなく、「障害者も他の器官を使って健常者と同じことができる」を実感できたようです。「同じような生活ができる。それこそが平等」「それは「絵が好きだ」というところが突き動かしたもので、障害者か健常者かなんて関係ありません。」「人と顔と顔を合わせてコミュニケーションをしたいという、当たり前彼の言葉に心がしめつけられる」などの感想の言葉から、「われわれの中にいる障害者」「人には無限の可能性がある」に気付いた学生がいるように考えられるからです。

参考・引用文献

- ・奥山俊子 2001年『口や足で描く（学習体験）－手の不自由から生まれる描画の魅力－』（東北芸術文化学会 会報22）
- ・奥山俊子 2006年 からだで学ぶ（その1）－視覚不自由の表現「手で作る」から「手で描く」へ－（山形短期大学教育研究 第6号）
- ・大野晋、上野健爾著 2001年 『学力があぶない』（岩波新書）
- ・C. H. ウォディントン著 白上謙一・碓井益雄訳 1964年『生命の本質』（岩波書店）
- ・池谷裕二著 2001年 『記憶力を強くする』（講談社ブルーバックス）
- ・吉村啓子・文 松下香住・絵 1980年 『わたし いややねん』（偕成社）
- ・ホームボックス オフィス作 1999年アメリカ『重度障害者 絵筆に込めた闘志』（NHKドキュメント放映）
- ・毎日新聞 2009.11.29『手足不自由な青森：佐藤さん』

